

心療内科のひとり言

中野弘一 医師

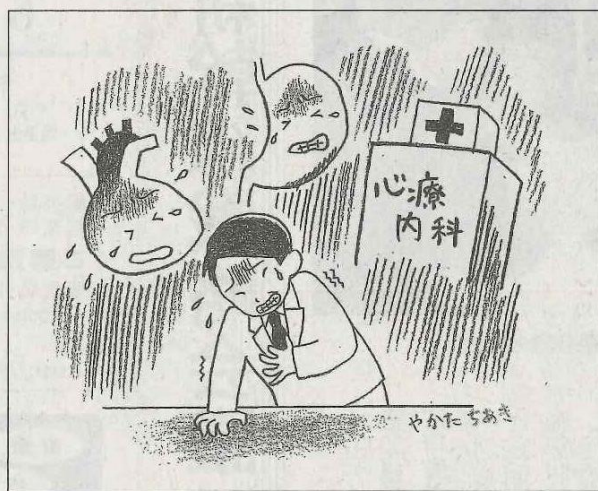
35歳の中年男性が持つ続する胸痛のため相談に来た。彼は小学生のころから甲子園を目指した球児で、大学卒業後、食品関係の営業の仕事に就いたが、地域の野球サークルにも所属し、定期戦に参加しているスポーツマンである。

2か月前にデスクワーク中に左の前胸部に突き上げるような痛みを感じた。しばらく我慢したが、激痛は緩和

しなかった。直感的に心臓だと思ったようだ。昨年末、上司の課長が仕事で胸が痛みだし、会社から救急車で搬送され、その日のうちに亡くなった。

病名は心筋梗塞と聞いていたので、自分も心臓の異変に違いない

と思い込み、入院の覚悟で、救急外来を受診した。すぐに心電図や採血などの検査が行われ、結果を待っている間も自分の心臓は大丈夫でホッとする一方で、



急に胸が痛くなった

夫かと不安でいっぱいであつたが、結果は異常なしと言われ帰宅した。

1週間後の夜に再び同様の痛みが出現し、緊急総合病院を受診した。検査が繰り返されたが、救急医から心臓は大丈夫と診断された。翌日、総合病院の総合診療部を受診し、消化器の内視鏡検査を受けた。食道下端がただれている逆流性食道炎という新たな病気を

本当に大丈夫かと不安になり、すっかり自分の体に自信がなくなつてしまつたよつた。夜になるとまた痛みが出そつで、気になり眠れなくなつてきたので、担当医に相談したところ心療内科を勧められた。彼はさらに三つ目の病氣になつたかと、絶望しつつ私の心療内科に受診に来た。

徐々にご飯を安心して食べられ、夜も眠れるようになった。彼は検査を受けた前日から「心臓病ではないと思つた」と私に教えてくれた。

症状を持ちながらも入院せずに社会生活は十分できそつた。良くなるレールに乗ることができたと思つた。

ご家族にも、病態を理解していただき、痛み恐怖への治療の参加を授

(三愛病院心療内科医師・東邦大学医学部教授)